

論 文

女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機軸の探索

— 過剰適応傾向, 抑うつ傾向, および自尊心との関連 —

¹ 諸 井 克 英 ² 坂 上 舞
³ 野 島 彩 ³ 岡 本 有美子

¹同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・教授²同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・2011年度卒業生³同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・2012年度卒業生The Exploration of Psychological Mechanism Underlying
Ibasyo Feeling in Female Undergraduates:

— The relations with over-adaptation, depression, and self-esteem. —

¹Katsuhide Moroi ²Mai Sakaue
³Aya Nojima ³Yumiko Okamoto

¹Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor²Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2011³Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2012**Abstract**

The present study explored the relationships among “ibashyo” feeling, over-adaptation, and psychological health in female undergraduates. “Ibasyo” Feeling Scale (Kishi & Moroi, 2011), Over-Adaptation Scale (Ishizu & Ambo, 2008), the Self-rating Depression Scale (Zung, 1965), and Self-Esteem Scale (Rosenberg, 1979) were administered to female undergraduates ($N=424$). By the factor analysis (likelihood method with promax rotations), five factors for “Ibasyo” Feeling Scale and four factors for Over-Adaptation Scale were extracted. According to the covariance structure analysis, over-adaptation deteriorated positive feeling for “ibashyo” and psychological health, and positive feeling for “ibashyo” heightened the psychological health. The significance of research in psychological mechanism underlying “ibashyo” feeling was discussed.

Keywords: “ibashyo” feeling, over-adaptation, depression, self-esteem.

I. 問題

学校社会が抱える様々な問題が居場所感覚の

形成・維持の重要性と関連づけられることによつて、居場所感覚に関する実証的研究が盛んに試みられている。居場所概念の広まりの主な

契機として2つをあげることができよう。①'85年の不登校児のための施設「東京シューレ」の開設（「学校外の学びの場所を作り出し、子どもが自由に通ってくる居場所」）；住田（2003）参照、②不登校問題に対する文部省（現在、文部科学省）の'92年通達における学校という居場所の重要性に関する言及（「学校は、児童生徒にとって自己の存在感を実感でき精神的に安心していることのできる場所－「心の居場所」－としての役割を果たすことが求められる」（文部省、1992））。

岸・諸井（2011）も、女子大学生を対象として、大学と家庭という2つの主要な生活領域での居場所感覚の測定を行い、正準相関分析によって家庭での居場所感覚が大学での居場所感覚と弁別的に結びついていることを見いだした。本研究は、この居場所感覚の形成・維持の基底にある心理学的機制を明らかにするために行われた。このために、後述する過剰適応傾向が居場所感覚におよぼす影響や、過剰適応傾向や居場所感覚が心理的健康に与える影響を実証的に検討した。

過剰適応傾向については、学校社会での不登校や「キレル」現象などの問題症状を「いい子・よい子」として外見的に振る舞う自己呈示上の病理として臨床的に扱われ始めたことが契機となり（大竹・五十嵐、2005）、この問題に関する実証的研究が盛んになった。浅井（2012）は、「行き過ぎた適応」としての過剰適応傾向を取り扱ったわが国の先行研究を検討し、過剰適応傾向に関する様々な定義が存在することを指摘した。しかしながら、石津（2006）が過剰適応傾向を測定する尺度を開発して以降、次の定義に収斂されていることを示した。「環境からの要求や期待に個人が完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や欲求に応える努力を行うこと」（石津・安保、2008）。

石津・安保（2008）は、この定義に従って作成された32項目から成る尺度を中学生に実施した。因子分析により、「他者配慮」、「期待

に添う努力（石津・安保では期待に沿う努力と表記）」、「人からよく思われたい欲求」、「自己抑制」、「自己不全感」の5因子から構成されることが確認された。さらに、確認的因子分析を用いて、これらの因子が《内的側面（「自己抑制」、「自己不全感」）》と《外的側面（「他者配慮」、「期待に添う努力」、「人からよく思われたい欲求」）》の高次因子に分離することを示した。石津・安保は、内的側面での過剰適応傾向が学校適応感を損ねているのに、対照的に外的側面での過剰適応傾向は学校適応感を促進することを認めた。つまり、過剰適応傾向の2側面の弁別的機能が明らかにされた。

男女高校生を対象とした益子（2009）の研究では、過剰適応傾向は、抑うつ、強迫観念、および対人恐怖心性と全般的に結びついていたが、不登校傾向とは内的側面での過剰適応傾向（「自己抑制」、「自己不全感」）のみが関連していた。また、浅井（2014）は、男女大学生・院生を対象とし、共分散構造分析を用いて次の男女差を見いだした。男女ともに内的側面での過剰適応傾向（「自己抑制」、「自己不全感」）が人生に対する満足感を損なうのに、女子でのみ外的側面での過剰適応傾向（「他者配慮」、「期待に添う努力」、「人からよく思われたい欲求」）が満足感を高めた。

心理的健康とは、Compton, Smith, Cornish, & Qualls（1996）によれば、①個人的成長（肯定的な心理学的性質や潜在的可能性の完全な発達）、②主観的幸福感（肯定的情動性と、自分の人生の受容可能性に関する認知的判断）、③ストレス耐性的性格（心理社会的ストレスに対する免疫系反応や抵抗）の3側面から構成される。本研究では、心理的健康の側面として自尊心と抑うつ傾向を取りあげる。

自尊心は、「自分に対する全体的な肯定的評価の程度」（Rosenberg, 1979）を指す。子どもから大人への過渡期に位置する青年にとっては、自我同一性拡散（Erikson, 1959）の克服が重要な課題となり、自己に対する肯定的評価の獲得が中心的になる。

ソシオメーター (Sociometer) 理論を提唱した Leary & Baumeister (2000) によれば、自尊心は、自分が他者から受容・拒絶されているかに関する主観的指標であり、この指標の変動に応じて行動が生起する。したがって、肯定的な居場所感覚の形成・維持は、自尊心の高揚につながる。さらに、過剰適応傾向がまわりの対人的環境の要請との不一致 (戸川, 1956) に対する過剰な反応であることを考えれば、過剰適応傾向の目的は先述した主観的指標の調整にあることになる。

次に、本研究で取り扱う心理的健康のもう 1 つの側面の抑うつ傾向について述べる。Beck (1976) によれば、抑うつ患者の心理的世界は、次の 3 つの主要な特徴つまり「認知の 3 徴」に彩られている。①世界に対する否定的考え、②自分自身に対する否定的概念、③将来に対する否定的な評価。居場所感覚や過剰適応傾向と抑うつ傾向との関係は、自尊心の場合と同様である。肯定的な居場所感覚の形成・維持の失敗は、①や②となり、結果として③にもつながる。他方、まわりの対人的環境の要請に対する不一致 (戸川, 1956) に由来する過剰適応傾向は、②の側面に関連するはずである。

居場所感覚と心理的健康に関する先行研究は以上のことを基本的に支持している。石本 (2010) は、男女中学生と大学生を対象として、2 種類の居場所感覚 (「本来感 (ありのままにいられる)」, 「自己有用感 (役に立っていると見える)」) が自己肯定意識の高揚につながることを認めた。また、中・高校生を対象とした大久保 (2005) によれば、肯定的な居場所感覚 (大久保は青年用適応感尺度と名づけているが、「環境と自分がうまくフィット (居場所がある) と感じる時」) に関する自由記述から作成された尺度であることを考慮すると、居場所感覚を測定していると解釈可能) が抑うつ傾向を有意に低下させていた。石本・倉澤 (2009) は、抑うつ傾向ではないが、大学生活での意欲減退傾向が大学での居場所感覚 (自己有用感) によって抑制されることを男女大学生を用いて示した。

興味深いことに、杉本 (2009) は、男女大学生の抑うつ傾向が現在の居場所の状態ではなく中学時代の居場所の有無によって影響されることを見いだした。

しかしながら、先述した過剰適応傾向の 2 側面の弁別性 (石津・安保, 2008; 益子, 2009; 浅井, 2014) は、過剰適応傾向と心理的傾向との関係が単純でないことを示している。つまり、過剰適応傾向の外的側面の高まりは対人関係の良好化によって心理的健康を高める可能性がある。ところが、外的側面での過剰適応傾向は本来の自分との乖離をもたらすので、心理的健康を損ねるとも予測される。例えば、男女中学生を対象とした石津・安保 (2007) によると、過剰適応傾向の 5 側面すべてが抑うつ傾向を高め、とりわけ自己不全感で強い関係が認められた。また、松岡・スンデル・野村 (2013) は、男女大学生を対象とし、過剰適応傾向が高い者のうち反芻 (「自己への脅威や喪失、不正によって動機づけられ」, 「ネガティブで慢性的、かつ持続性の強い」自己注目 (高野・丹野, 2010)) を積極的に行くと「不安と不眠」や「うつ傾向」に陥ることを示した。

以上の考えに基づき、本研究では、「過剰適応傾向・居場所感覚⇒心理的健康 (自尊心、抑うつ傾向)」という因果関係の検討をするために、女子大学生を対象とした質問紙調査を実施した。

II. 方法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して、質問紙調査を実施した (2011 年 6 月 27 日, 11 月 7 日, 11 月 10 日)。回答にあたっては匿名性を保証し、質問紙実施後に調査目的と研究上の意義を簡潔に説明した。青年期の範囲を逸脱している者 (25 歳以上) を除き、以下の尺度に完全回答した女子学生 424 名を分析対象とした (6 月実施分: 3 回生 165 名, 4 回生 15 名; 11 月実施分: 1 回生 124 名, 2 回生 101 名, 3 回生 17 名, 4 回生 2 名)。回答者の平均年齢は 19.78 歳 ($SD=0.95$, 18~23 歳)

表 1-a 過剰適応傾向尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転 <math>k=3</math>）の結果—回転後の負荷量—

	*	I	II	III	IV
〔I. 自己抑制〕					
over_b_4 私は、心の中で思っていることを人に伝えないことが多い。	自	.80	.05	-.05	-.10
over_a_8 私は、自分が思っていることを口に出さないようにする。	自	.77	.12	-.04	-.09
over_c_3 私は、相手と違うことを思っている、それを相手に伝えないことが多い。	自	.72	.06	.05	-.20
over_b_8 私は、自分が考えていることをすぐには言わないようにする。	自	.71	.01	.01	.02
over_a_4 私は、自分の気持ちを抑えてしまうほうだ。	自	.70	-.03	.05	.07
over_b_5 私は、「自分さえ我慢すればいい」と思うことが多い。	他	.59	.01	-.06	.26
over_a_9 私は、自分の意見を無理に通すことはしない。	自	.56	-.21	.13	.12
over_b_9 私は、辛いことがあっても我慢する。	他	.42	-.05	-.04	.34
〔II. 期待に添う努力〕					
over_c_5 私は、自分の価値がなくなってしまうのではないかと心配になり、がむしゃらに頑張る。	期	.08	.59	-.06	.09
over_a_10 私は、期待には応えなくては行けないと思う。	期	-.02	.56	.11	.13
over_a_2 私は、まわりの人から「能力が低い」と思われぬように頑張る。	期	-.04	.56	.10	-.06
over_c_2 私は、期待に応えるために、成績をあげるように努力する。	期	-.04	.56	.01	.09
over_a_6 私は、期待に応えないと、叱られそうで心配になる。	期	.26	.44	.08	-.03
over_b_2 私は、まわりの人からの期待を敏感に感じている。	期	-.07	.42	.03	.33
〔III. 人からよく思われたい欲求〕					
over_a_7 私は、まわりの人から気に入られたいと思う。	人	-.03	-.05	.86	.04
over_b_7 私は、自分をよく見せたいと思う。	人	-.09	.16	.65	-.09
over_a_3 私は、相手に嫌われないように行動する。	人	.16	-.01	.55	.10
over_c_6 私は、他人の顔色や様子が気になるほうである。	人	.21	.04	.52	.08
over_b_3 私は、まわりの人から認めてもらいたいと思う。	人	-.03	.33	.50	-.06
〔IV. 他者配慮〕					
over_a_5 私は、自分が少し困っても、相手のために何かしてあげることが多い。	他	.13	-.00	-.09	.68
over_b_1 私は、相手がして欲しいことは何かと考える。	他	-.01	-.01	.14	.53
over_c_1 私は、まわりの人からの要求に敏感なほうである。	他	-.03	.25	.05	.44
over_c_4 私は、とにかく人の役に立ちたいと思う。	他	-.10	.16	.00	.43
〔因子間相関〕					
	I	****	.23	.29	.39
	II		****	.56	.33
	III			****	.29

N=424

適合度： $\chi^2_{(167)}=364.10, p=.001$

初期固有値 >1.21; 初期説明率 53.90%

*: 石津・安保 (2008) との対応 <他者配慮, 期待に沿う努力, 人からよく思われた欲求, 自己抑制>

であった。

質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本的属性に加え、①過剰適応傾向尺度、②抑うつ傾向尺度、③大学における居場所感覚尺度、および④自尊心尺度から構成されている。

1. 過剰適応傾向尺度

日常生活における回答者の過剰適応傾向を測定するために、石津・安保 (2008) の過剰適応尺度を利用した。彼らは、過剰適応傾向を「環境からの要求や期待に個人が完全に近い形

で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも、外的な期待や欲求に応える努力を行うこと」(石津・安保, 2008) と定義し、32項目から成る尺度を作成した。因子分析により、「他者配慮」、「期待に添う努力」、「人からよく思われたい欲求」、「自己抑制」、「自己不全感」の5因子から構成されることが確認されている。さらに、確認的因子分析は、これらの因子が《内的側面（「自己抑制」、「自己不全感」）》と《外的側面（「他者配慮」、「期待に添う努力」、「人からよく思われたい欲求」）》の高次因子に分離する。

表 1-b うつ傾向尺度に関する因子分析（最尤法，プロマックス回転 <math>k=3</math>）の結果—回転後の負荷量—

	I	II
〔I. 抑うつ感〕		
sds_a_1 沈みがちで憂うつな気分だ。	.75	-.12
sds_b_5 ふだんよりも、いらいらしている。	.69	.00
sds_a_3 泣いたり、泣きたくなる。	.61	-.03
sds_a_10 理由もないのに、疲れてしまう。	.61	-.04
sds_a_9 ふだんよりも動悸がする。	.58	.11
sds_b_3 落ち着かず、じっとしてられない。	.51	.09
sds_a_4 夜よく眠れずに困る。	.45	.10
〔II. 充実感・自己有能感〕		
sds_b_8 自分の生活は、かなり充実している。	-.10	.68
sds_b_10 ふだん行っていることに満足している。	-.12	.67
sds_b_4 自分の将来に希望もてる。	.03	.57
sds_b_7 自分が有能でまわりから必要とされる人間だと思う。	.18	.54
sds_b_6 物事をたやすく決断できると思う。	.09	.47
〔因子間相関〕	I	-.52

N=424

適合度： $\chi^2_{(43)}=113.14, p=.001$

初期固有値 >1.74; 初期説明率 47.23%

本研究では、石津・安保（2008）が同定した5つの側面のうち、「自己不全感」は測定しなかった。これは、項目内容が後述する自尊心尺度項目と重なっているからである。さらに、「自己抑制」のうち1項目（「自分自身が思っていることは、外に出さない」）は意図的色彩が強いのて除去した。残りの26項目を「私は、…」の形に修正した（表1-a, 付表1参照）。これらの項目それぞれについて「この6ヵ月間のあなたの気持ち」にあてはまるかどうかを4点尺度で回答させた（「4. かなりあてはまる」, 「3. どちらかといえばあてはまる」, 「2. どちらかといえばあてはまらない」, 「1. ほとんどあてはまらない」）。

2. 抑うつ傾向尺度

抑うつ傾向を測定するために、Zung（1965）が作成した自己評定式抑うつ尺度（SDS）の日本語版を用いた。諸井（2000）は、福田・小林（1973）による日本語版も参照しながら、次のように、Zung（1965）を改変した。①原文を参照しながら、理解しにくい表現を修正し、とくに項目6「I still enjoy sex」は柔らかない表現に変更した。②原版では評定基準として「検

査時における状態」を用いているが、DSM-III-R（American Psychiatric Association, 1987）での大うつ病の診断基準を参考に、「この2週間の状態」を評定基準とした（表1-b, 付表1参照）。さらに、③福田・小林（1973）では「ない、たまに」～「ほとんどいつも」の4点尺度形式を用いているが、「かなりあてはまる」～「ほとんどあてはまらない」の4点尺度に変更した。

3. 大学における居場所感覚尺度

岸・諸井（2012）は、「特定の生活領域に対する態度や感情全体」を居場所感覚と定義し、回答者が通う大学での居場所感覚と家庭での居場所感覚とを測定する尺度（各60項目）を先行研究に基づいて作成した。本研究では、大学における居場所感覚尺度をそのまま利用した（表1-c, 付表1参照）。岸・諸井（2012）は、因子分析により大学における居場所感覚が5側面（「被受容感」, 「精神的安定感」, 「自己疎外感」, 「自己没入感」, 「自己有用感」）から構成されることを見いだした。

「この6ヵ月間」の「大学」にいる時の自分自身の様子を思い浮かべさせ、60項目それぞれ

表 1-c 大学における居場所感覚尺度に関する因子分析(最尤法, プロマックス回転 <math>k=3</math>)の結果—回転後の負荷量—

		**	I	II	III	IV	V
(I. 精神的安定感)							
uni_a_5 大学にいますと、私はリラックスできる。	精	.82	-.12	.06	-.12	-.05	
uni_d_5 大学にいますと、私はほっとできる。	精	.81	-.07	.01	.05	-.03	
uni_e_1 大学にいますと、私はくつろげる。	精	.77	-.05	-.04	-.05	.06	
uni_e_8 大学にいますと、私は安定した気持ちになる。	精	.77	-.10	-.02	.02	.03	
uni_c_9 大学にいますと、私は居心地がいい。	精	.77	-.08	.06	-.04	-.05	
uni_c_3 大学にいますと、私は安心できる。	精	.75	-.05	.09	-.03	.02	
uni_b_1 大学にいますと、私は幸せを感じる。	精	.69	.05	.17	.16	-.05	
uni_e_7 大学にいますと、私は生き生きとできる。	精	.62	-.14	.07	.09	.04	
uni_d_6 大学にいますと、私は自分自身を実感できる。	精	.61	.13	-.00	.26	.13	
uni_b_7 大学にいますと、私は楽しくなる。	精	.55	-.13	.26	.07	-.04	
uni_a_6 大学では、私だけの時間がある。	没	.50	.06	-.27	.17	-.00	
uni_c_7 大学では、ありのままの私を出せる。	精	.50	-.24	.16	-.10	.04	
uni_c_1 大学では、ありのままの私でいられる。	精	.48	-.18	.26	-.06	-.04	
uni_c_10 大学では、私は心から泣いたり笑ったりできる。	精	.45	-.10	.16	.03	.11	
uni_e_2 大学にいますと、私は自分を見失わないでいられる。	残	.43	-.07	.09	.21	.07	
(II. 自己疎外感)							
uni_d_1 大学には、私の居場所がない感じがする。	疎		-.04	.72	-.07	-.11	.01
uni_c_5 大学では、私は一人ぼっちの感じがする。	疎		-.13	.72	-.09	.12	-.04
uni_f_10 大学では、私はまわりの人から受け入れられていない気がする。	疎		.09	.70	-.12	-.05	-.06
uni_c_8 大学にいますと、私はさびしくなる。	疎		-.15	.66	-.02	-.03	.04
uni_a_7 大学にいますと、私は自分だけ孤立している感じがする。	疎		-.05	.65	-.12	.00	-.06
uni_f_1 大学にいますと、私はまごつくことが多い。	疎		.03	.64	.09	-.05	.04
uni_b_3 大学では、私はまわりの人から必要とされていないような気がする。	疎		-.01	.63	.16	-.02	-.31
uni_c_2 大学にいますと、私は落ち込みがちになる。	疎		-.17	.62	-.01	-.06	.03
uni_f_5 大学では、私はまわりを人の輪になかなか入れない。	疎		-.05	.62	-.13	.07	-.09
uni_d_4 大学では、私の考えや悩みを誰にも分かってもらえない感じがする。	疎		.10	.54	-.29	-.18	.03
uni_d_2 大学には、いたくないと思う。	残		-.33	.51	-.01	-.17	.12
(III. 被受容感)							
uni_b_10 大学には、私を大切にしてくれる人がいる。	被		.02	-.01	.82	.00	.01
uni_e_4 大学には、私と気持ちに通じ合う人がいる。	被		.04	.01	.78	.04	-.00
uni_e_10 大学には、私のことを気にかけてくれる人がいる。	被		.06	-.01	.74	.00	.02
uni_a_8 大学には、私の悩みを聞いてくれる人がいる。	被		.02	-.07	.74	-.03	.02
uni_d_8 大学には、私を受け入れてくれる人がいる。	被		-.02	-.09	.70	.07	.03
uni_a_2 大学には、私を本当に理解してくれる人がいる。	被		.12	.10	.68	.03	.10
uni_b_5 大学には、私の存在を認めてくれる人がいる。	被		-.13	-.10	.68	.02	.16
uni_b_6 大学には、私と同じ考え方や価値観をもっている人がいる。	被		.05	-.05	.65	.06	.00
uni_b_4 大学にいますと、誰かと一緒にいることができる。	被		.01	-.29	.50	-.12	.06
(IV. 自己没入感)							
uni_f_3 大学にいても、私には得るものがないような感じがする。	没	*	.03	.11	-.01	-.75	.06
uni_d_7 大学にいても、私は何もすることがない。	没	*	.10	.16	-.09	-.73	.01
uni_e_9 大学にいても、私は何をしてもよく分からない。	残	*	-.03	.30	.05	-.58	.00
uni_f_2 大学にいますと、私はやりがいを感じる。	没		.35	.11	-.06	.54	.20
uni_b_2 大学では、私は何かに夢中になれる。	没		.39	.20	-.05	.50	.11
uni_f_4 大学では、私は自分の好きなことができる。	没		.29	.14	.08	.49	.00
uni_d_10 大学では、私自身を見つめることができない。	没	*	-.02	.25	-.07	-.49	.09
(V. 自己有用感)							
uni_a_9 大学に私がいないと、困る人がいる。	有		.02	.05	.17	-.06	.74
uni_a_3 大学に私がいないと、さびしがる人がいる。	残		.03	-.03	.23	-.09	.64
uni_e_5 大学では、私は頼りにされている。	有		-.01	-.10	.07	.04	.63
uni_f_6 大学では、私のことを必要とする人がいる。	有		.00	-.09	.20	-.00	.63
uni_c_6 大学では、誰かに役立つことができる。	有		.10	-.02	-.06	.15	.56
[因子間相関]							
		I	****	-.58	.60	.51	.49
		II		****	-.65	-.37	-.39
		III			****	.31	.58
		IV				****	.28

N=424

* 逆転項目

適合度: $\chi^2_{(856)}=1890.77, p=.001$

初期固有値 >1.21; 初期説明率 64.34%

**: 岸・諸井 (2011) との対応 <被受容感, 精神的安定感, 自己疎外感, 自己没入感, 自己有用感; 残余項目 >

表 1-d 諸尺度の検討と尺度得点に関する記述的特徴

	平均値	* 標準偏差	相関値 (a)	信頼性 (b)	正規性検定 (c)
[過剰適応傾向]					
I. 自己抑制	2.78	c	0.59	.50 ~ .70	$\alpha=.87$ $z=1.18, p=.122$
II. 期待に添う努力	2.72	c	0.55	.43 ~ .59	$\alpha=.76$ $z=1.96, p=.001$
III. 人からよく思われたい欲求	3.32	a	0.52	.54 ~ .72	$\alpha=.81$ $z=2.19, p=.001$
IV. 他者配慮	2.98	b	0.48	.38 ~ .48	$\alpha=.65$ $z=2.58, p=.001$
[反復測定分散分析]	$F_{(3/1269)}=178.02, p=.001$				
[大学における居場所感覚]					
I. 精神的安定感	2.65	b	0.64	.35 ~ .83	$\alpha=.95$ $z=2.06, p=.001$
II. 自己疎外感	1.95	d	0.64	.53 ~ .80	$\alpha=.93$ $z=2.04, p=.001$
III. 被受容感	3.07	a	0.64	.66 ~ .81	$\alpha=.93$ $z=2.69, p=.001$
IV. 自己没入感	2.71	b	0.62	.56 ~ .70	$\alpha=.87$ $z=1.51, p=.020$
V. 自己有用感	2.38	c	0.62	.58 ~ .75	$\alpha=.87$ $z=2.21, p=.001$
[反復測定分散分析]	$F_{(4/1692)}=202.22, p=.001$				
[抑うつ傾向]					
I. 自己抑制	2.24		0.63	.37 ~ .67	$\alpha=.79$ $z=1.27, p=.079$
II. 充実感・自己有能感	2.33		0.54	.37 ~ .55	$\alpha=.72$ $z=2.04, p=.001$
[対応のある t 検定 < 対 2.5 >]	I : $t_{(423)}=-8.33, p=.001$; II : $t_{(423)}=-6.48, p=.001$				
自尊心	2.43		0.58	.49 ~ .67	$\alpha=.86$ $z=1.02, p=.251$
[対応のある t 検定 < 対 2.5 >]	$t_{(423)}=-2.33, p=.001$				

N=424

(a): 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値 (すべて $p<.001$)

(b): Cronbach の信頼性係数

* 異なる英文字は有意に異なることを表す ($p<.05$, Bonferroni の方法)

れがあてはまる程度を 4 点尺度で評定させた (「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。

4. 自尊心尺度

Rosenberg (1979) の自尊心尺度を用いて (諸井, 1995), 自分に対する全体的な肯定的評価の程度を測定した (表 1-d, 付表 1 参照)。10 項目それぞれについて, 「この 6 ヶ月」という基準で回答者にあてはまる程度を 4 点尺度で回答させた (「4. かなりあてはまる」～「1. ほとんどあてはまらない」)。

なお, 以上の 4 尺度それぞれでの評定順の効果を次のようにして相殺した。自尊心尺度では 1 頁の前半と後半で項目を入れ替えた 2 種類の質問紙を用意した。これ以外の尺度では, 尺度ごとに評定用紙を頁単位 (過剰適応傾向尺度 3 頁; 抑うつ傾向度 2 頁; 大学における居場所感覚尺度 6 頁) で無作為に並び替えた。

III. 結果

各尺度の検討

4 尺度それぞれで項目水準での検討を行い, 項目平均値の偏り ($1.5 < m < 3.5$) と標準偏差値 ($SD > .60$) のチェックをし, 不適切な項目を除去した。次に, 自尊心尺度を除く 3 尺度では, 残りの項目を対象に因子分析 (最尤法, プロマックス回転 $<k=3>$) を行った。初期因子固有値 ≥ 1.00 を充たす解をすべて求め, 適切な解を探索した。その際, ①特定因子への負荷量が十分に大きく (絶対値 $\geq .40$), ②他因子への負荷が小さい (絶対値 $< .40$) という基準を設定した。各項目が単一の因子にのみ .40 以上の負荷量を示すように, 項目を削除しながら, ①と②の基準を充たすまで分析を反復した。明確な因子パターンが得られる解を採用した。因子分析の結果に基づいて, 各因子への負荷量を基準に (絶対値 $\geq .40$) に項目を選別し, 因子

表2 尺度得点間の関係ーピアソン相関値ー

	p-2	p-3	p-4	q-1	q-2	q-3	q-4	q-5	r-1	r-2	s	
[過剰適応傾向]												
I. 自己抑制	p-1	.30 a	.32 a	.35 a	-.12 c	.24 a	-.10 c	-.01	-.11 c	.17 a	-.23 a	-.26 a
II. 期待に添う努力	p-2	****	.58 a	.45 a	.01	.22 a	-.06	.02	.07	.30 a	-.08	-.17 a
III. 人からよく思われたい欲求	p-3		****	.35 a	-.03	.13 b	.02	.00	-.04	.18 a	-.20 a	-.17 a
IV. 他者配慮	p-4			****	.11 c	-.01	.19 a	.15 a	.21 a	.06	.00	-.01
[大学における居場所感覚]												
I. 精神的安定感	q-1				****	-.72	.69 a	.67 a	.59 a	-.32 a	.42 a	.33 a
II. 自己疎外感	q-2					****	-.72 a	-.55 a	-.54 a	.50 a	-.36 a	-.41 a
III. 被受容感	q-3						****	.45 a	.68 a	-.34 a	.33 a	.36 a
IV. 自己没入感	q-4							****	.41 a	-.32 a	.38 a	.40 a
V. 自己有用感	q-5								****	-.23 a	.43 a	.43 a
[抑うつ傾向]												
I. 抑うつ感	r-1									****	-.37 a	-.44 a
II. 充実感・自己有能感	r-2										****	.64 a
自尊心	s											****

N=424

a: $p < .001$; b: $p < .01$; c: $p < .05$

概念に一致した方向に得点が高くなるように得点調整をしたうえで下位尺度項目を構成した。下位尺度ごとに、1次元性の確認を行い(項目-全体相関分析, α 係数), 構成項目の平均値を下位尺度得点とした。

単一次元尺度と仮定されている自尊心尺度では, 得点が高いほど尊心が高くなるように得点を調整し, 主成分分析での未回転第I主成分負荷量(絶対値 $\geq .40$)を基準に不適切な項目を除去した。最終的に項目-全体相関分析と α 係数値により単一次元性を確認し, 項目の平均値を尺度得点とした。

1. 過剰適応傾向尺度

項目水準ではすべての項目が適切であり, 26項目を対象に2~6因子解を求めた。明確な解釈が可能な4因子解を採用した(表1-a)。石津・安保(2008)の結果にほぼ対応していたので, それぞれ「自己抑制」, 「期待に添う努力」, 「人からよく思われたい欲求」, および「他者配慮」と名づけた。「他者配慮」の信頼性が若干低い許容範囲であった($\alpha > .60$; 表1-d)。

なお, これら4得点を対象に, 2次因子分析を試みたが, 第II因子以降の初期固有値が1.00を上回らなかった(第II因子初期固有値 .77), 本研究では石津・安保(2008)と

は異なり過剰適応傾向の内的側面と外的側面の分離は認められなかった。これと一致して, 4下位尺度得点の相互相関を見ても(表2), すべて有意な正の相関が見られた。

2. 抑うつ傾向尺度

項目水準での検討で不適切であった2項目を除く18項目を対象に2~4因子解を求めた。意気消沈した日常状態を表す因子と日常生活に対する充実感や自己有能感を示す因子から成る2因子解を採用した(表1-b)。それぞれ, 「抑うつ感」と「充実感・自己有能感」と命名した。 α 係数値はまずまずであった(表1-d)。

3. 大学における居場所感覚尺度

項目水準で不適切であった1項目を除いた59項目を対象に因子分析を行った。2~8因子解が可能であったが, 岸・諸井(2011)が得た5因子解がほぼ再現されていることが確認できたので, 5因子解を採用した(表1-c)。岸・諸井に従って, それぞれ「精神的安定感」, 「自己疎外感」, 「被受容感」, 「自己没入感」, および「自己有用感」とした。5下位尺度の α 係数値(表1-d)は良好な値を示した($> .80$)。

4. 自尊心尺度

10項目すべて項目水準での分析では良好であった。しかし, 全項目を対象とした主成分分

析での se_a_8 の未回転主成分負荷量がかなり低かった (.25)。そこで、この項目を除く 9 項目を対象にすると、どの項目の負荷量も高かった (>.60)。9 項目の平均値を自尊心得点としたが、十分な信頼性を示した (表 1-d)。

5. 尺度得点の検討

以上の分析で得られた尺度得点について種々の検討をしたが (表 1-d)、得点分布の正規性検定では、「自己抑制」、「抑うつ感」、および「自尊心」以外の得点では正規分布からの有意な逸脱が認められた。しかし、 z 値の大きさからすべて許容範囲と判断した。過剰適応傾向 4 得点と居場所感覚 5 得点について反復測定分散分析を用いて平均値差を検討すると、それぞれ「人からよく思われたい欲求 > 他者配慮 > 自己抑制 \approx 期待に添う努力」、「被受容感 > 自己没入感 \approx 精神的安定感 > 自己有用感 > 自己疎外感」の有意な傾向が見られた。また、抑うつ傾向 2 得点と自尊心得点について尺度中性点 (2.5) と比較すると、いずれの得点も尺度中性点を有意に下回った。

過剰適応傾向、居場所感覚、および心理的健康との関連

1. ピアソン相関分析

以上の分析で得られた得点相互の関連を検討するために、ピアソン相関分析を行った (表 2)。なお、過剰適応傾向の曲線の影響も考えられるために、過剰適応傾向の各下位尺度得点の二乗値を求め (= (下位尺度得点 - 下位尺度得点平均値)²)、他尺度得点とのピアソン相関値を検討した (付表 2)。しかし、全体的に相関の大きさ (r) は小さいと判断できたので (絶対値 < .12)、二乗値を用いた分析は以下では行わなかった。

①過剰適応傾向と居場所感覚との関係: 「自己抑制」では、「自己疎外感」と有意な正の相関、「精神的安定感」、「被受容感」、および「自己有用感」と有意な負の相関が得られた。対照的に、「他者配慮」では、「精神的安定感」、「被受容感」、「自己没入感」、および「自己有用感」と有意な正

の相関が認められた。「期待に添う努力」と「人からよく思われたい欲求」では、ともに「自己疎外感」との間に有意な正の相関があった。

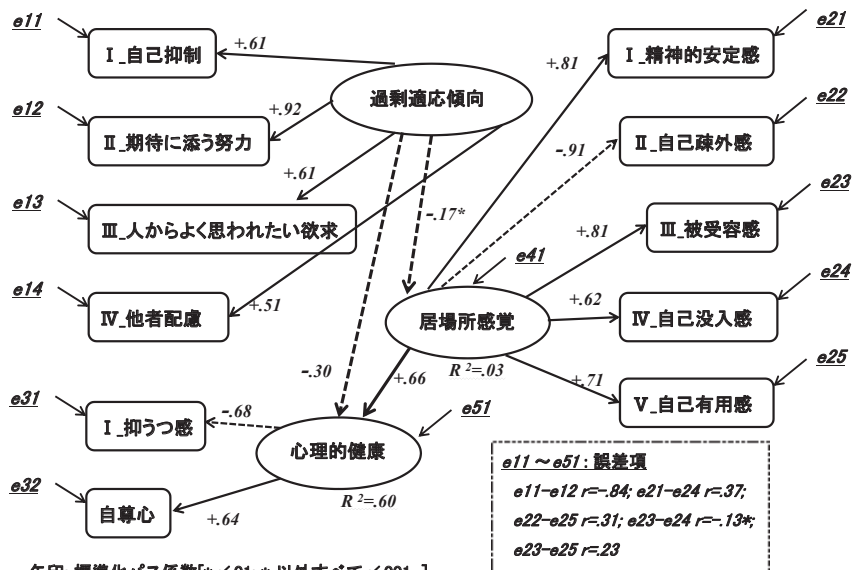
②過剰適応傾向および居場所感覚と心理的健康 (抑うつ傾向、自尊心) との関係: 「自己抑制」、「期待に添う努力」、および「人からよく思われたい欲求」は、「抑うつ感」との間に有意な正の相関があり、「自尊心」とでは有意な負の相関を示した。「自己抑制」と「人からよく思われたい欲求」は、「充実感・自己有能感」との間に有意な負の相関があった。興味深いことに、「他者配慮」は、心理的健康 3 得点と無関係であった。

居場所感覚と心理的健康との関連については、すべての相関値が有意であった。「精神的安定感」、「被受容感」、「自己没入感」、および「自己有用感」は、「充実感・自己有能感」や「自尊心」と正の関連、「抑うつ感」と負の関連を示した。「自己疎外感」は逆の関係を見せた。

2. 共分散構造分析

過剰適応傾向、居場所感覚、および心理的健康との関連を検討するために共分散構造分析 (*Amos22.0*) を行った。潜在変数として {過剰適応傾向}、{居場所感覚}、および {心理的健康} を設定した。前二者については、それぞれの下位尺度得点を観測変数とした。また、{心理的健康} では、「抑うつ感」と「自尊心」を観測変数として用いた。抑うつ傾向尺度から抽出された「充実感・自己有能感」は「自尊心」との間に高い有意な正の相関を示したので ($r=.64$; 表 2 参照)、この共分散構造分析では「自尊心」のほうを対象とした。潜在変数間の関係方向は、「過剰適応傾向 \Rightarrow 居場所感覚・心理的健康」と「居場所感覚 \Rightarrow 心理的健康」とした。修正指数を参照しながらパスの設定を変え、モデル適合度を改善し、最終モデルを得た (図 1)。なお、*GFI* は .90 を上回っているものの、*AGFI* はやや低く、*RMSEA* も .10 を越えており、この解は今後検討の必要があるといえる。

まず、各潜在変数と観測変数との関係を確認すると、{居場所感覚} と {心理的健康} では



矢印: 標準化パス係数[* $p < .01$; *以外すべて $p < .001$]

適合度: $\chi^2_{(38)} = 231.38, p = .001, GFI = .91, AGFI = .84, RMSEA = .11$

図1 過剰適応傾向, 居場所感覚, および心理的健康の関連

— 一共分散構造分析 (Amos22.0, 最尤推定法) による因果分析 (N=424) —

否定的状態を表す変数に対する負の係数が認められたが、{過剰適応傾向}では4つの観測変数すべてが正の係数を示した。次に、全体的傾向を読み取ると、次のことがいえる。過剰適応傾向は、肯定的な居場所感覚の形成を妨げるとともに、心理的健康も損ねた。居場所感覚の形成は心理的健康を促進した。ただし、係数の大きさから、「過剰適応傾向⇒居場所感覚」の影響関係はそれほど強くないと判断できる。

IV. 考察

本研究の主要な目的は、大学における居場所感覚の形成・維持が過剰適応傾向や心理的健康(抑うつ傾向, 自尊心)とどのような関わりをもつかを明らかにすることであった。過剰適応傾向が居場所感覚や心理的健康におよぼす影響や、居場所感覚が心理的健康に与える影響を実証的に検討した。過剰適応傾向尺度や大学における居場所感覚尺度に関する因子分析は、先行研究(石津・安保, 2008; 岸・諸井, 2011)で抽出された因子構造をほぼ再現した。したがって、本研究の過剰適応傾向4因子(「自己抑制」,

「期待に添う努力」, 「人からよく思われたい欲求」, 「他者配慮」)や居場所感覚5因子(「精神的安定感」, 「自己疎外感」, 「被受容感」, 「自己没入感」, 「自己有用感」)は頑健であるといえよう。

石津・安保(2008)によれば、過剰適応傾向は、《内的側面(「自己抑制」, 「自己不全感」)》と《外的側面(「他者配慮」, 「期待に添う努力」, 「人からよく思われたい欲求」)》から構成され、外的側面での過剰適応は対人関係の円滑化につながる可能性を指摘した。本研究では、「他者配慮」という点での過剰適応傾向が肯定的な居場所感覚(「精神的安定感」, 「被受容感」, 「自己没入感」, および「自己有用感」)と有意な正の相関を示した。しかし、「期待に添う努力」や「人からよく思われたい欲求」は、石津・安保(2008)の考えと異なり、負の対人機能をもつとともに、心理的健康にも悪影響をおよぼしていた。外的側面での過剰適応傾向は、それ自体で周囲からの受容可能性を高めるが、同時に自分の本来の気持ちや考えとの乖離感を生じる。「他者配慮」は、まわりの人々に対する共

感的志向性を高めるために高い対人的効果をもたらす、自分自身の本来的な考えや気持ち自体も変容させるのかもしれない。例えば、Davis (1994) によれば、共感は、「視点取得」、「共感的配慮」、「個人的苦痛」、および「想像性」の側面から構成される。Davis の「視点取得<日常生活で自発的に他人の心理的立場をとる傾向>」が対人関係の形成・維持にとって重要な側面であることを踏まえれば、以上の推測は妥当であろう。

しかし、共分散構造分析の結果が示すところでは、過剰適応傾向は、居場所感覚や心理的適応に対して負の影響をもつといえる。したがって、今後は、過剰適応傾向の2側面の弁別的機能を精緻に再検討する必要がある。本研究では、過剰適応傾向の測定は石津・安保 (2008) に従って回答者に日常生活の様子を思い浮かべさせたが、大学生活への過剰適応傾向に限定すると、異なる結果が得られるかもしれない。さらに、大学新生などが直面する大学という新たな環境場面への適応時期では (諸井, 1986; 1991 参照)、外的側面での過剰適応傾向が有益な効果を発揮する可能性がある。

大学生活における肯定的な居場所感覚の形成・維持は、予測通り、心理的健康に対する有益な効果をもたらすことが、ピアソン相関分析の水準でも示され、共分散構造分析によっても強い正の影響が確認できた。これは、先行研究 (石本, 2010; 大久保, 2005 など) の知見と一致する。しかし、先述したように、心理的健康の側面は多様で (Compton *et al.*, 1996)、本研究で扱った自尊心や抑うつ傾向のみではない。したがって、肯定的な居場所感覚の形成が心理的健康全般に正の影響をおよぼすかを今後検討する必要がある。

ところで、本研究で対象とした同志社女子大学の学生は、今出川キャンパスと京田辺キャンパスのいずれかに属している。この2つのキャンパスは地理的条件や学部構成での差異に加え、所属学生総数が異なる。京田辺キャンパスのほうが今出川キャンパスに比べ相対的に学生数が多い (京田辺キャンパス $N=4140$, 今出川キャン

パス $N=2341$; 2014年5月1日時点)。そこで、所属キャンパスの効果を検討するために、過剰適応傾向4得点、居場所感覚5得点、抑うつ傾向2得点については多変量分散分析、自尊心については t 検定を行った (京田辺キャンパス条件 $N=245$, 今出川キャンパス条件 $N=179$)。過剰適応傾向に関する多変量分散分析では、有意なキャンパスの効果が検出され ($F_{(4/419)}=3.39, p=.01$)、下位検定を行うと「期待に添う努力」で京田辺キャンパス所属学生のほうが有意に過剰に適応する傾向が認められた ($F_{(1/422)}=12.66, p=.001$; 京田辺 $m=2.80, SD=.53$; 今出川 $m=2.61, SD=.55$)。他の分析では有意なキャンパスの効果は得られなかった (居場所感覚: $F_{(5/418)}=.97, ns.$; 抑うつ傾向: $F_{(2/421)}=2.53, ns.$; 自尊心: $t_{(422)}=.78, ns.$)。

したがって、本研究では、相対的に所属学生数が多い京田辺キャンパスのほうが「期待に添う努力」を喚起している傾向があったものの、他のすべての側面でキャンパスの効果が見られなかったことから、学生の所属キャンパスの効果は全体的には現れなかったと結論できよう。しかし、この所属キャンパスの効果については、所属学年などと絡めて今後も探るべきである。

以上に述べたように、大学における居場所感覚の形成・維持の基底にある心理学的機軸の一端を解明するという本研究の主目的は概ね達成されたが、今後検討すべき種々の問題点も浮き彫りになった。これらの問題点を踏まえ、引き続き居場所感覚の基底にある心理学的機軸の解明に取り組んで行くべきであろう。

< 付記 >

- (1) 本報告は、坂上 舞が第1著者の下で卒業研究のために立案・実施した研究に基づいている。野島 彩と岡本有美子が追加データを収集し、卒業研究のために併せてデータ分析を行った。
- (2) データの統計的解析にあたって、IBM SPSS Statistics version 22.0.0 for Windows と Amos22.0 for Windows を利用した。

V. 引用文献

- 浅井継悟 2012 日本における過剰適応研究の研究動向 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **60(2)**, 283-294.
- 浅井継悟 2014 青年期の過剰適応が主観的幸福感に及ぼす影響 心理学研究, **85(2)**, 196-202.
- Beck, A.T. 1976 *Cognitive therapy and the emotional disorders*. 大野 裕訳『認知療法－精神療法の新しい発展－』1990 岩崎学術出版社
- Compton, W.C. Smith M.L. Cornish K.A. & Quails D.L. 1996 Factors structure of mental health measures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 406-413.
- Davis, M.H. 1994 *Empathy: A social psychological approach*. Westview Press. 菊池章夫 (訳)『共感の社会心理学－人間関係の基礎－』1999 川島書店
- Erikson, E.H. 1959 *Psychological issues: Identity and the life cycle*. International University Press. 小此木啓吾 (訳編)『自我同一性－アイデンティティとライフ・サイクル－』1973 誠信書房
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- 石本雄真 2010 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, **21(3)**, 278-286.
- 石本雄真・倉澤知子 2009 心の居場所と大学生のアパシー 傾向との関連 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **2(2)**, 227-232.
- 石津憲一郎・安保英勇 2007 中学生の抑うつ傾向と過剰適応－学校適応に関する保護者評定と自己評定の観点を含めて－ 東北大学院教育学研究科研究年報, **55(2)**, 271-288.
- 石津憲一郎・安保英勇 2008 中学生の過剰適応傾向が学校適応感とストレス反応に与える影響 教育心理学研究, **56**, 23-31.
- 岸可奈子・諸井克英 2011 女子大学生における居場所感覚－大学と家庭という心理的空間－ 同志社女子大学生生活科学, **45**, 20-28.
- Leary M.R. & Baumeister R.F. 2000 The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. *Advances in Experimental Social Psychology*, **32**, 1-62.
- 益子洋人 2009 高校生の過剰適応傾向と, 抑うつ, 強迫, 対人恐怖心性, 不登校傾向との関連－高等学校2校の調査から－ 学校メンタルヘルス, **12(1)**, 69-76.
- 松岡美樹子・スデル彩・野村 忍 2013 過剰適応者における自己注目が精神的健康に及ぼす影響 早稲田大学臨床心理学研究, **12(1)**, 81-89.
- 文部省 1992 登校拒否問題への対応について－文部省初等中等教育局長通知－ http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19920924001/t19920924001.html
- 諸井克英 1986 大学新入生の生活事態変化に伴う孤独感 実験社会心理学研究, **25(2)**, 115-125.
- 諸井克英 1991 生活事態変化に伴う孤独感 人文論集 (静岡大学人文学部), **41**, 29-63.
- 諸井克英 1995 成人女性における電話による社会的支援と心理学的健康 社会心理学研究, **11**, 51-62.
- 諸井克英 2000 人は出来事の原因をどのように帰属するか?－帰属複雑性尺度の検討－ 人文論集 (静岡大学人文学部), **51(1)**, 1-25.
- 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因－青年用適応感尺度の作成と学校別の検討－ 教育心理学研究, **53**, 307-319.
- 大竹典子・五十嵐透子 2005 思春期における過剰適応とその関連要因 上越教育大学心理教育相談研究, **4**, 151-162.
- Rosenberg, M. (1979). *Conceiving the self*. Basic Books.
- 杉本希映 2009『中学生の「居場所環境」における心理的機能に関する研究』風間書房
- 住田正樹 2003 子どもたちの「居場所」と対人的世界 住田正樹・南博文 (編)『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会, pp.3-17.
- 高野慶輔・丹野義彦 2010 反芻に対する肯定的信念と反芻・省察 パーソナリティ研究, **19(1)**, 15-24.
- 戸川行男 1956『適応と欲求』金子書房
- Zung W.W.K. 1965 A Self-rating Depression Scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.

付表 1 各尺度での残余項目

[適応過剰傾向尺度]	[居場所感覚尺度]
over_a_1 私は、相手がどんな気持ちか考えることが多い。	uni_a_1 大学では、私自身のプライバシーが守られていない感じがする。
over_b_6 私は、人から褒めてもらえることを考えて行動する。	uni_a_4 大学は、私にとって居心地が悪い。
over_b_10 私は、やりたくないことでも無理をしてやることが多い。	uni_a_10 大学では、私には共感できないことが多い。
[うつ傾向尺度]	[自尊心尺度]
sds_a_2 朝方は、自分の気分がいちばんよいときだ。	uni_b_8 大学では、私自身のことについて考えることができる。
sds_a_5 食欲は、ふつう通りだ。	uni_b_9 大学にいと、私は無視されている感じがする。*
sds_a_6 異性に対して関心がある。	uni_c_4 大学では、私は物思いにふけることができる。
sds_a_7 自分がやせ気味であることに、気づく。*	uni_d_3 大学には、私が役割を背負わされているものがある。
sds_a_8 便秘に悩む。	uni_d_9 大学では、私が支えとなっている人がいる。
sds_b_1 ふだん通りの爽快な気分である。	uni_e_3 大学にいと、私はストレスを感じる。
sds_b_2 ふだん行っていることをたやすくできる。	uni_e_6 大学では、私の思い通りにできないことが多い。
sds_b_9 自分が死ねば、まわりの人が楽しく過ごせると思う。*	uni_f_7 大学に、私は満足している。
	uni_f_8 大学にいても、私は自分らしきを出せない。
	uni_f_9 大学では、私は自由な感じがする。
	se_a_8 私は、もっと自分を尊敬できたらと思う。

*: 平均値 ≥ 1.5 < 対応のある t 検定 >

付表 2 過剰適応傾向二乗値得点と他の測度との関係 - ピアソン相関値 -

	[過剰適応傾向二乗値]*			
	I _ 自己抑制_2	II _ 期待に添う努力_2	III _ 人からよく思われたい欲求_2	IV _ 他者配慮_2
[大学における居場所感覚]				
I. 精神的安定感	.00	-.05	.02	-.11 c
II. 自己疎外感	.02	.01	-.09	.08
III. 被受容感	-.05	-.02	-.01	-.08
IV. 自己没入感	-.04	.01	.03	-.01
V. 自己有用感	-.10 c	-.09	-.04	-.12 c
[抑うつ傾向]				
I. 抑うつ感	.04	-.05	-.09	.05
II. 充実感・自己有能感	-.07	.03	.07	-.11 c
自尊心	-.04	-.00	.04	-.05

N=424

c: $p < .05$ *: 二乗値 = (下位尺度得点 - 下位尺度得点平均値)²